



南總里見八大傳第九輯

イ曾  
600  
279



14  
600  
279

八犬傳第九輯下帙下套之中後序



智の知也。人生れて耳目の及ぶ所物として知らるる。知るといふは其理を極め、  
 是を辨るるふあふされが。智の要と為さる格物致知の則學者の先務也。雖  
 然是を知る而已あらず。慧を死者の悟るる由る。才を死者の智と致をこるる。是  
 らの故に智慧と云才智と云佛説の所云般若の智慧也。智と慧と具足  
 あり。悟るる致を死を才と云智慧も亦大なる哉。蓋智と慧と相佐けく  
 用と做さる。譬人の身と魂と魄と有るが如し。魂の則心神也。魄の則神  
 系也。人の心の欲する所魄の資助あふされば。動一足を運。動靜云  
 爲坐臥行止一も其如意なる。智慧と才幹と相佐けく。善語致さる。亦  
 る。是理をとりて知る。然る。知の上智あり。邪智あり。上智は良善の  
 事。用ひく。毫も奸悪の事。不稔ら。進退必度。不稱さ。動くといふも。跌

八犬傳九輯卷百二十一

八犬傳九輯卷百二十一

これ賢才睿智といふ才の智の乖る者也。是を以難と云。才ある智るは。則下愚なり。又邪智の奸悪の事。用ひて仁義の心を。進むを知りて退くこと。思ふを動くと。人の害あり。奸民盗見の才あり。是なり。或は又良知不し。心正しく博く学びて。奇才あれども。命凶なり。用ひられず。且勢利の附る。富貴を羨まむ。同好同志の友稀る。但し中絶の聖賢と師と友として。隱居放言。春日秋夜を長くとせ。常の書と著して。其智と龍の志。俗者あり。元の四維。賢中清の李笠公。是の度とせ。是より下。唐山中。云。稗官者流。困俗の云。戯作者。是なり。その中。彼大筆と陋筆あり。猶白狐と野狐あり。白狐も。柴木の一。騰人見て。並に狐と呼ぶ。白狐の野狐。皆功徳を功徳と殊る。然るに。柱の膠。村学究。玉と石と。擇む。或は那才と。或は彼名と。媚む者。其書の出ると。少く。毎小。遮り。眉をうち。頻卑めて。是等の漢

かくの如く。学問あり。何ぞ。儒の章句と。誦。子弟を教て。真の道を傳へざるや。只是意匠を費し。紙筆を費し。多く。梓東の火。世を誣ひ俗を惑せる。是憎むべし。厭ふべし。と。咳くも。聞これあり。是等の腐亂の偏見而已。蓋博く学得く。退れ。戯墨。遊。彼大筆。作者。然るに。大九經籍詞章の学。和漢の先哲。叮寧。注疏して。学者と。教導す。もの。世俗。皆教と。厭ふ。を用。空言を。欺び。或は又。奇を好む。人の好むを。聴く。欲は。達者の。戯墨。遊。事。凡近。取。誼を。勸懲。空言。以。塵俗の。惑。を。覚。水滸。西遊。三國。演義。平山。燕。兩。傳。の。五。奇。書。あり。文章。巧。致。至。奇。至。妙。其。深。意。を。推。考。則。齊。諧。と。鼻。祖。と。て。反。三。教。の。旨。不。違。釋。氏。の。所。謂。善。巧。方。便。五。百。の。阿。羅。漢。二。十。五。の。菩。薩。此。功。徳。の。伯。仲。ま。と。の。過。り。と。ま。る。水。滸。の。如。は。彼。土。る。具。眼。の

評山全集  
西文傳

者の。其深意を悟るる。況や此上の俗客婦幼の漢文俗語を一行  
 も讀むべからざる。通俗解話の一書なる其書舶來して久しくありぬ  
 休も其趣を規ふ由る。只俗客婦幼のるるをさく戲墨を事と考ゆる  
 名人達もよく唐山の俗語を讀ゆる。師と稱する。否を知らざる吾其冊子を  
 一卷も取らぬせされん。但作者の用心の寧勸懲の二字あり然るを淫  
 姓を上日とせる者時好の媚時好の稱多。書肆の廊を賑せり。吾其冊子を  
 所之因る昨の非を知るよりあり。寛政文化の間吾戲墨る臭冊子と合卷  
 物の画本ありと恥らふ。然るも思ふに近曾の年  
 年の吾編次合卷物の本の新編金瓶梅を除くの外一書も新作あり  
 正るれば。小利を欲する似而非書肆者。吾舊作る物の本と次心再板  
 して画を新しく。書名も重なるもの更なる。皆新板と偽り記して看官を欺る作

者。其深意を悟るる。是等の心をも既去歳の冬も文化中吾舊作る。賽八丈  
 て不繪冊子の画を更めて次心翻刻して新板と偽り記するものありと考ゆる。其  
 吾是を詰り新板の二字を削らせり然るも其書肆今茲も亦懲りず。又文  
 化三年丙寅の春吾舊作大師河原権子話不画冊子と又次心再板して  
 本文の画を減し。端像二頁を附増て像替を文書加え詞書をも増減して画の  
 其偽を外めて云云とせり。素より利の為理義を辨知らぬ鳥詩の癡  
 漢るれ。只強情を事として亟不兼服せんと考ゆる。畢竟見戲の冊子に偽  
 る僻事とせらるる。久く世に貼るべし。三十五年前の舊作を今の婦幼の  
 欺れて新板と思ふあり。又吾舊作る物の本と次心再板して画を減し。端像二頁を附増て像替を文書加え詞書をも増減して画の  
 不とも必知るべし。然るも一時の瞋怒を棄て。彼鳥詩人の己が自恣備若人史



南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目錄

卷之

四十

壹

第百六十七回

奔馬逐北犬江籠暴雛禽  
再戰場親兵衛會五知己

第百六十八回

衝突三陣靈豬奏再功  
報答舊恩成孝全前言

卷之

四十

貳

第百六十九回

拾出野坑親兵衛受賜  
掃除風葉諸勇士立談

第百七十回

神藥施得敵兵再生  
現八拔箭插水死將

卷之

四十

三

第百七十一回

操神變伏姬華猶子初陣  
謁舊君信乃詳父祖忠義

卷之

四十

四

第百七十二回

定正水路行大兵  
音音江中燒一船

第百七十三回

借數艘大角柱義武  
建降旗豐俊愚定正

第百七十四回

萬里一水道節射小仇  
八百八人毛野麩大敵

卷之四十五

第七十五回

六顯靈祐子  
禮儀失時時有為

第七十六回

禍福反覆之士同功  
追兵屢逼忠臣極主

右第一百七十六回以上為下帙下編中以下為下。共陸續刊行。當至結局大團圓云。

卷之四十六

第七十七回

一顆智王途懲一騎驕將  
四個保質反捉兩個保質

第七十八回

有種雪恥復歸御黨  
大水陸濟度眾鬼

卷之四十七

第七十九回

照文歸陳房總多福  
東西和睦兩國開津

第一百八十四回

義成重賞功臣妻八女  
信隆還任舊城免罪過

卷之四十八

第一百八十八回

孤龍貽化石、大蟬脫  
八行反壁八行傳十世

回外剩筆

頭陀話說枕中四十八城  
稗史大成本傳二十七年

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目錄終



あまのこゝろを  
あつてそとへ  
こころをさす  
あまのこゝろを  
頼鳥齋

梶原后平二  
景純

長尾太郎  
為景

八木傳九郎

七



性美而名  
亦艶汝是  
佳人後身  
愚山人

洞就為手古丹  
美容

振照俱教二  
弘經

八木傳九郎

三





二四的寄合

五郎とあらし

非是穿命  
之鼠輩  
當為知主  
之狗黨  
信天翁

須之利壇五郎

人物頭倡刀



沖の石を  
あつた  
たへるち  
のら死夜の月  
羊角人

三浦隆興守

義同

三浦暴二郎

義武



のあまのりやそち  
めんの小書つるく  
人平をせぬあ  
あみのくさひ  
曲亭棟入

山鳩  
やまのつばき



里見八犬傳。一百八十一回。以  
 多歲苦樂將盡稿因而自贊曰。  
 知吾者其唯八犬傳歟。不知吾  
 者其唯八犬傳歟。傳傳可知可  
 知傳可癡可知。上傳以下十  
 敗鼓亦藏草以倣良醫。

辛丑孟春 七十五翁荃蓑笠又戲識

南總里見八犬傳第九輯卷之四十一

東都 曲亭主人編次

第百六十四

再戰場小親兵衛五知已小會生



再說大江親兵衛長尾景春の堅陣と一瞬間の殺顔と逃るを透さむ  
 迂ふ程小政木大金姥雪代四郎直塚紀三石龜次因大越卿三向水五十三  
 太枝獨鈷素多吉漕地喜勘太大江の親兵衛及伴當室方も勝の乘  
 たる勢以劇く皆後れと相從へ義通の先鋒の頭人振照俱教一弘經も刀痕小  
 撓多兵を找め奔馬小鞭と鳴くけり。當下亦義通もみづら敵と疑ふ馬を  
 其方へ乘向ふ辰相急不走りをる馬も閃りと下立て主の鏢も推かりを料  
 ざりて中途の勅敵閉戦難多速く折豫其名を知らる。政木孝嗣とや

りが義旗の援けも是れ幸ひ又思ひけり。京師より大江親兵衛が折る地の地かへる。然も敵景春を伐敗走らし是十二分の御利運のいさめ然も飽む思食く漫れ逃るを趕ひ窮猫狗児を破る害も量りて疾岡山還らる。意も長尾景春が其隊の兵を多くて這路條へ出く来る岡山の御陣に成兵寡た他風を知らず攻め合ひて去る。かこきも如く國府臺と相對ひて涯るふ前所河を渡る要害の地多くは尙敵に据られる。臺の城も後意守りかきやいひて遷せぬ。と理り切く諫か義通の景春の敗れまゝを趕りて果さず中途より遷す。この本意するに豫父君の嚴命あり。身の後見を諫られる家の老の諫言を聞きしに信乃現八等が聞戦の安危什麼と左右今も心おかれども現岡山を喪つ後悔其甲斐なるべしと思ひ復して黙然と當下東六郎辰

相の士卒と救歸陣を示し俱義通の相俱し。岡の陣營を返し令ふ自家の刀瘡見の潤就鳥古内を首やく。士卒多くこれおぼも皆幸ひに窮所を外れ死に至る者なり。辰相則雜兵數十名相見せし臺の城を遣はし。介程大江親兵衛の自家の士卒先づ乘る名馬青海波の蹄信せて其馬直敵と趕ふと急りければ既し迫り退れ去れる。長尾景春の一軍大郎為景殿の五百個の士卒を領て後陣に在り。今趕近つ大江親兵衛の小勢をるを見りて冷笑ひ毫も諜も枯芒花の深は刃を銚の歩兵を雨云名伏置く。敵も落さると構りて退口の草伏を趕来る敵の猛將勇士を數に捕る。死を多し親兵衛も精れ敵も敵も今も止るべし勢ひる。況や名馬青海波の疾と飛鳥の弥増れ憶り近くる隨ふ那草伏の歩兵も枯芒花の裏より火蓋を鑽て撞と發せる。鉄砲の寛ひ皆

錯く那身中らむ怪し蜚り以て八天士の各身と衛る靈王あり然らば  
 時親兵衛が胸邊より奴然たる靈光兩道見ゆ那歩兵の眼成  
 射けれ歩兵の憶も吐嗟とむる不鏢砲と捨て敷馬の立程五十二天素  
 多吉胞弟兄の俱長械を抜く走りてあふふふける親兵衛馬上の見えそ  
 登よ那奴等と鏡をせそとあふふ早く五十二天素を吉あると長械を令直  
 走りうち向ひ悍く勇る勢ひの中るべもあふれ逃んとせを走らせ胞弟兄  
 長械振閃めく件之個の敵兵と矢場小毘にけり其間大江親兵衛の  
 馬を敵中へ乗入れ群立ち敵の衆兵を鎗りて多く難仕を一騎の大奮勇四  
 下と拂く縦横を身小駈破れ長尾の士卒驚え恐れ憶も逃走せ  
 長尾為景怒り不地堪む士卒と罵る聲も烈しく獨馬上の親兵衛と鎗を  
 合せ一上一下とるを盡す少年も勇るも獨勇を堅を摧く本事あり武藝

足らざるあわねも然とく大江の敵の鎗法漸々衰へ既危く見  
 えり為景の老黨近習十名許返り主を援けて親兵衛と戦ふ  
 と競ふ程もあむ政木孝嗣姥雪與保五十二天素の隊の乾見の每齊  
 吐と走りあ推隔相柱え六七人の瘡を負せ残る三人を五十二天素の  
 刃を斃け當下大江親兵衛の既疲れ為景と刺さ一鎗不殺をばを  
 素より仁慈の本性え猶一霎時疲勞せ怯むと横小拂へ為景の  
 鎗と持き馬より控と難落され俯平張る蠢ゆる身を起えと拵れを  
 親兵衛透さ馬の上の鎗令直幹當り為景の背を押さ毫も動せざり  
 ぐ為景の面も赤らり耶と聲をけ幾番反起き欲する小聲千鬼の石を  
 壓措きどく喘も出さるけり浩処直塚紀三六潜地喜勘太以下れ  
 伴當及五個の夥兵と俱走りてあふふける親兵衛ヤヤと夥兵を吸て頭

子

親兵衛  
馬上平  
為景を  
摘とり  
下くだす



ろくでなし

八代傳九郎卷四

文政堂



吉良

八代傳九郎卷四

十二

文政堂

のく虜兒を指示せ給殿兵等の唯々と心も果せ下界あり。為景の臥床を索を  
 子。され。然るが長尾の士卒の或る敷れ或る落亡。四下敵のわたり。親兵  
 衛の孝嗣次團太卿云々志もあて。刺。五十三太素。吉其母。入義通君。從  
 ひま。り。この戰場に在ると見て且訝り且欬び。躬て馬より下。下。程。振照俱  
 教二弘經の東六郎辰相の指揮に依り。一千有餘の隊の兵と新参の野武士四  
 的寄舎五郎須々利壇五郎並其後兵六十餘名と相共。又親兵衛と相援  
 ん。今稍あふまふれば親兵衛の孝嗣門の面談と先閑。隨即俱教二  
 們を迎へ勞ひ。却剛才の地方。敵の殿の隊長と擒。不。做。事。の顛末  
 箇様々々と告知せ。又。我。隊。より人の噂。知。ぬ。長尾景春の家子  
 太郎為景と喚。做。さ。の。少年。胆。勇。武。藝。十二分の本事あり。今  
 意。今。我。生。拘。る。勇。少年。必。是。為。景。和。殿。他。と。牽。せ。還。く。の

是。と。上。の。我。の。舊。友。政。木。大。全。們。料。も。再。會。の。情。義。を。替。へ。て。伴。あ。り  
 御陣へ。あ。る。景。春。遠。く。逃。亡。し。た。こ。こ。這。里。多。兵。を。益。益。隊。の。兵。と。皆。俱。一。玉  
 ひ。と。弘。經。敬。服。し。て。且。羞。々。答。る。車。職。等。の。和。殿。と。昨。今。也。對。面。今。を  
 始。る。其。武。畧。勇。敢。の。今。古。獨。歩。歩。の。隙。は。一。違。さ。け。和。殿。の。さ。の。の  
 犬。塚。犬。飼。俱。是。豪。傑。の。士。也。萬。人。の。敵。と。い。へ。其。傳。も。中。一。車。職。等。の  
 斗。臂。の。細。人。驥。附。の。功。と。欲。ま。り。の。响。の。閉。戦。散。る。隊。の。兵。亟。に。聚。合。さ。り  
 者。後。の。戦。ひ。あ。る。ま。り。の。面。を。と。ひ。れ。と。勸。解。し。寄。舎。五。壇。五。郎。亦。共  
 侶。あ。ら。れ。て。還。参。の。罪。を。謝。し。け。當。下。俱。教。又。い。や。今。當。所。不。要。な。と  
 ても。卑。職。が。預。ま。り。の。後。に。あ。る。隊。の。兵。を。送。り。俱。し。か。り。の。上。の。御。上。目。小  
 違。ふ。似。り。景。春。愛。子。の。生。拘。れ。と。多。く。怨。小。堪。せ。途。より。返。り。ま。り。後  
 是。も。亦。知。る。車。職。二。三。百。個。の。雜。兵。を。從。へ。其。生。口。を。牽。せ。退。ら。の

義を饒したまひぬ。と請ふを親兵衛守る。否と聞戦の勝負の隊兵の多  
 少に依る。あわじ機に臨む。と喪ふ心して其進むと脱免の如く其退くは處  
 女の似く未戦不安危を知る者。必勝と云ふ。それをも上の御意とあはれを  
 推辭せらる。最も畏し。今六隊兵五百を留め。其餘の俱して退り。あま  
 まれ上の御意不恃ら。分る。越度る。と諭を俱教二強難て竟  
 其議不任せ。精兵五百名を抜出して。是を親兵衛に渡與。從せ。却孝嗣  
 次圍太。卿三。五。十。天。素。吉。吉。今。日。の。義。戰。を。叮。寧。不。勞。以。謝  
 して。且。親。兵。衛。の。終。つ。舒。く。を。儘。為。景。を。受。命。の。隊。の。兵。小。率。せ。隊。伍。齊  
 整。と。馬。を。め。め。暴。河。原。を。岡。山。を。投。退。り。け。小。程。小。大。江。親。兵。衛。の。猶。思  
 ふ。よ。あ。れ。親。兵。衛。二。名。を。召。上。各。事。任。せ。と。吩。咐。れ。皆。あ。る。る。直。走。り。不。葛。西。の  
 へ。へ。赴。け。る。悠。々。又。親。兵。衛。の。喜。勘。太。吟。吟。て。敵。の。棄。果。を。草。烟。と。五。六。枚

合よきて。取。主。客。の。坐。を。儲。然。而。孝。嗣。們。を。請。ひ。坐。せ。其。身。も。坐。して。對。面。を  
 登。時。親。兵。衛。が。空。う。料。ら。ざ。り。け。政。木。主。石。龜。師。弟。向。水。弟。兄。恙。も。あ。る。と。愛  
 しく。就。中。評。し。た。政。木。主。客。二。人。の。上。へ。の。り。でも。あ。る。た。ら。ま。今。茲。四。月。某。日。の。日。和。殿  
 管。三。名。の。結。城。を。左。右。川。橋。を。渡。り。も。果。敵。の。連。發。あ。る。鑊。砲。の。擊。隊。を。推。流  
 され。沈。沈。と。後。後。求。捕。れ。も。知。る。よ。う。に。我。の。さ。る。と。義。兄。弟。等。七。大。都。で。最  
 惜。々。今。小。至。く。忘。る。時。る。の。館。も。守。り。召。て。最。忝。に。御。説。あ。る。然。れ。又。我。們  
 八。人。の。結。城。よ。り。か。つ。さ。ふ。故。わ。り。て。穂。北。の。落。點。の。宿。所。小。居。り。程。も。る。館。よ。り。大  
 師。父。と。御。使。使。稻。村。へ。召。さ。せ。ゆ。い。思。遇。孰。も。淺。く。を。開。が。中。小。我。仁。の。京。師。へ  
 使。を。奉。り。て。七。月。の。下。旬。より。那。地。小。在。り。館。の。願。せ。ゆ。い。如。く。檣。向。の。最。も。畏。れ  
 朝廷。より。我。們。八。人。の。姓。氏。を。賜。り。て。金。碗。宿。祿。を。ま。れ。悠。過。分。た。終。つ。あ。れ。が  
 不。測。の。憂。ひ。る。た。わ。い。管。領。政。元。主。の。計。ひ。專。平。て。副。使。小。參。り。る。登。崎。十一



郎の身の暇と賜りて我身の還るとと饒されを伴當へけ。那姥雪代四郎更と  
 發崎の若黨直塚紀二六と親兵五名と若黨奴隸六七名俱小京師の淹留  
 あり。前月廿四五日時候より同ト憂ふ沈まき在り。小我西館の御盛徳と諸神  
 諸菩薩伏姫神の真助も依りて虎妖對治の功あり。稍厄釋て主僕  
 皆還ることをり。一路中愛馬走帆の病て客舎小斃れり。是等の故又  
 日と費して稍信濃路を歩ける程我君不慮の軍旅の風聲漸々小具  
 鎌倉の兩管領諸將を連れぬ兵を合せ。安房上総を攻畧すまとの事の趣  
 せり。うらち驚き去向をいそふ上毛も東夷新関ありて過はるをいそ  
 得間道を尋索めり。今朝も武藏豊嶋より千住河を來る折衝小稲  
 村の城内の厩敷系に在せる。これ此名馬青海波の奇も河を渡りて這  
 方へ來る不逢一。訝り思ひか免便宜あるれば。馳て這馬より乘て

千住河を渡りて程那姥雪直塚親兵若黨奴隸の毎る或馬の尾は携り  
 或連柳の身を浮して。洞窟の岸の届る小敵あり。戦ひ勝て  
 降参の折其姓名と肇て。即野武士の頭領あり。其里侍る寄舎五郎と  
 壇五郎若原是當家へ歸服の情願あり。是より青海波の來歴も粗知  
 り。只の一隊を従へ。馬の足極不儘せ。心も御曹司の御危戦の折  
 騎着。勅敵長尾景春と。又拂ひ復這里。再戦の勝と。和殿等五個の  
 識。再會の秋あり。我上先かくの如。和殿並石龜師弟の再生の故。とあり。あ  
 ら。孝嗣次國大等。側聞せ。向水枝獨銛。隊の壯校。も  
 又四的須。利の兵每五百有餘個の軍兵。皆駭然と舌と巻く。奇談。感嘆  
 あり。姑早て孝嗣の親兵衛。向ひ。通愛。和君の高運。妙用。自然。稱  
 稱ひ。忠心。義胆。致。所神佛の真助。多。但。感心。とい。鳥。并。

敬服の外は、就我三人の上の、四月の時、俱和君に従ふ。那日、結城へ届る時、和君の歩の蝨け、一町あり、後れ、左右川を咽、野水、架る、把橋と渡り、程、誰の知、發出、幾十挺の銃、砲、小、數、は、け、と思ひ、この次、固太語と續て、身、水中、小、數、隊、推流、沈、後、我、あり、と、い、い、の、卿、三、咱、も、同、容、是、も、後、の、い、も、哥、其、お、説、出、ね、の、い、い、の、傍、を、見、え、れ、五、十、三、太、倉、天、點、頭、却、小、可、弟、兄、の、関、宿、小、船、果、時、結、城、へ、伴、と、饒、され、得、船、と、漕、退、け、家、路、と、投、て、還、る、の、い、い、送、憾、さ、堪、ざ、れ、家、弟、素、も、吉、と、商、量、さ、ら、和、郎、の、い、い、思、ふ、や、ら、量、兼、小、大、江、和、子、小、直、遇、せ、よ、乾、兒、們、と、共、居、小、水、路、と、上、總、を、送、の、い、い、素、藤、と、り、對、治、せ、ら、る、戰、場、へ、伴、れ、僅、小、落、人、を、搦、捕、く、賞、禄、小、米、と、賜、り、た、は、又、大、江、和、子、の、友、人、三、名、と、伴、く、結、城、の、法、會、へ、赴、く、と、い、い、我、們、又、是、を、送、り、

水路を関宿まであるが、法會の伴と饒され、勿論辛苦錢と。金幾枚、後、惠れ、と、錢、財、の、咱、等、の、本、意、お、わ、る、倍、羅、の、戰、場、菩、菩、薩、の、法、會、其、伴、の、省、れ、て、阿、容、と、と、い、い、の、い、い、人、へ、取、赫、変、の、事、や、乾、兒、們、不、悔、れ、我、關、宿、も、柴、船、の、結、城、へ、暢、小、流、あり、急、流、され、も、廣、く、其、地、々、の、莊、客、用、水、の、故、小、巨、船、の、漕、容、る、と、い、い、れ、れ、幸、ひ、い、い、今日、我、船、の、快、船、を、れ、易、く、て、い、い、結、城、へ、赴、く、願、て、法、會、と、見、て、退、り、の、議、什、麼、と、談、され、と、い、い、素、も、吉、語、と、續、く、小、可、是、を、ち、所、く、并、最、要、あ、る、王、張、和、子、の、知、れ、て、叱、り、と、も、分、説、の、い、い、も、わ、ん、然、ら、る、蝨、く、遺、復、せ、と、い、い、猛、可、小、船、と、合、更、り、又、関、宿、へ、漕、戻、を、程、不、既、り、て、目、暮、れ、る、只、得、那、里、小、船、と、歌、く、其、夜、の、明、と、俟、た、と、い、い、五、十、三、太、却、所、の、任、而、次、の、日、早、天、も、那、枝、流、へ、船、と、漕、入、れ、結、知、城、を、投、く、沂、る、小、川、幅、の、と、狭、く、流、急、され、船、着、ま、る、或、の、左、右、の、岸、小、敏、

立方樹の枝を掩れて去向見えざる処あり或は流波に船添りて竿を使未申  
 此処あり其頭の素を吉と岸に降せし船と曳せし瀬なる然るも猶薦ぬ折る  
 第兄水に下立く船と肩擔せり幸く推りて遣るに幾町を任せ辛苦不  
 時程り日長は四月の如く結城へ尚三里あるべしと思ふ比日影の既斜  
 るぬ心連り焦燥も其頭の特流狭くてせん樹も折る折る首紅人の浮屍  
 骸一人を至三人を船に歌り流れぬを噫息々々と咳せり竿の突流さ  
 ず欲さず細流の遣も反り得又素を吉の咳せり端に下立て竿を  
 其死骸と突流さすせ程忽地一聲苦と叫ぶを小可守を敬馬と云衣を  
 脱捨て下立く又其浮屍骸と見果して是政本主と石亀屋の乾父  
 乾見人誅くも亦痛き相識連三人を憐る横死胸波れてとてんとを  
 小可も亦も憐る二個の屍骸と左右を皆船へ曳棄せし見れば孰も身

體を銃瘡三之所のわらる猶幸は首部胸腹を空射所のみ只是腸と  
 脚の之然る故や三人俱死しるごとく見れば胸膈の温ゆる推其動脈あり  
 似ら原來の死絶せし疾水と吐せしと一個々々船へ推搦て倒れし腹を  
 推ま孰も水と吐きぬるも氣息を登時小可素を吉と商量を  
 るる人々昨日宿を相別れり大江主を伴れて結城の法會に赴け  
 ん小皆瘻を負て水に陥りしは必是故も我意不今日那里に不測の  
 禍鬼起るとあり聞諺も及びし猶果して介らぬ大江主の安危心許るし  
 然りとて這九死一生を三人をうち棄て陸を走り結城へも只其安危を知  
 るの事や鄙語に云喧嘩果は杖三味も事不益るの事也反て大  
 江主の恨も所詮船と漕戻して宿所へ還りて人々を活き結城の安  
 危も知れぬ女々ありの思んやとら傷を見れば素を吉詞を受接て思

兄弟箇中準るれ船と漕辰未急流の降舫其勢い創か似せ射  
 箭の如く又強けれ其嚙昏閑宿まで戻り猶も力と勅せ通宵漕の  
 程不其詰朝兩國河原宿所歸着れ一政本主們三人の爲醫師と  
 招て療治と請多膏茶と打せ湯劑を薦る不死ぬ果活せむる比又小可  
 情地不結城へ赴て和君達の安危と榜る不那里の風聲隠れぬと那正寺の  
 悪住持徳用結城の家臣長城枕介惻利堅名衆司經稜根生野飛雁大素  
 頼們法會と乱妨の事且件の僧俗奸虐人們皆八士不撃懲されて活恥と  
 曝せり又八士と大庵王反々結城殿を譽られて那里と退りぬひま  
 ゆかりの來る比も政本主石龜師弟へやなく疼可と赴りぬら敷れ脚の  
 筋縮り起居不自由られ無籠との在りぬらとを平三又續て傍て  
 三伏の夏過り秋八月不りし時候安房より來り商船八士達の上役

説問ひふ今いも八人きり見殿不仕まらぬ瀧田の城内不在り開ぐ中八江王の七  
 月の比使を奉りて京師へ赴ぬゆはとの時三個の客人達の昔を瘡比皆ら  
 る愈々脚自由不走行も生平不異なるぬらぬら唯弟折竹薦ゆていそ  
 安房へ赴たり見殿不仕ぬ那里八士達の在るれ事成るべしとのひりと政本主  
 も石龜又も俱不云と意直と演て從ふもわふ所非如幾をも我家不歇船  
 多く在りとも開か厭ふぬらぬらぬら素も富る我身るぬら銀る米る做海  
 折竹反々這個の客人達の盤纏と賣米と賣草と養る日も暮るぬらぬら  
 孝嗣咳して禁め親兵衛不告るまう我三君が薄命も且再生の事の顛  
 末い今這弟兄が口状不具るぬ然は是等の趣をいぬ和君不告るぬと思ぬぬ  
 から夏果るまで瘡愈され筆も把られぬ又七月の比も秋和君へ京師へ使  
 安房不在と歩をへ歸藩の便宜と待ぬぬ向水等が義俠の幫助ぬ我

のる石龜等々心むあはぬ長逗留し。做さるるあはるの今番里見家  
 危窮の軍役敵の則扇谷山内の両管領。大軍水陸より攻伐す。と  
 云撤文を市に掲げ。隱のあはる。石龜等々。扇谷の  
 人に向へ。和君の京より還れり。や。し。誰のあはる。知る。絶て。今本月の  
 五日に至り。扇谷の間謀見の安房より。原是向水の乾見を。五  
 五十二大隨即他と哄誘して。而敵の必事。務る。大江。王の京より。還る。  
 他大坂の軍師。六武士の防御使。寄隊。則箇様々。水陸の隊配。  
 叫に説示。困府臺の寄隊の大將。山内。顯定。主と足利成氏。主と両旗  
 副將。山内。憲房。王の兩隊の軍兵。六萬餘騎。実の四萬有餘。今朝。あは  
 五十子の城より。發向。て。龜越。陣。と。ひ。と。咱。の。義。を。傳。て。猛。可。の。主人  
 弟兄と石龜師弟。兩室。小。聚。合。密。談。さ。る。那。大江。の。我。恩。人。へ。介。る。

京師使して今番の大事。逢。る。朽。惜。思。ふ。我。今。那。人。成。の。代  
 里見殿の御為。一臂の力。盡して。那。恩。義。報。へ。信。の。扇。谷  
 殿。是。我。舊。君。へ。既。由。怨。地。と。易。く。雙。敵。を。討。つ。も。那。隊。向。て。言。さ。る。  
 前を飛。え。我。本。意。あ。は。る。困。府。臺。寄。隊。の。大。將。顯。定。父。子。と。成。氏。王  
 我。京。の。恩。も。義。も。あ。は。る。况。や。困。府。臺。の。城。中。里。見。義。通。君。大。將。の。防。禦  
 使。大。塚。大。飼。が。城。と。出。て。寄。隊。の。大。軍。を。迎。り。と。あ。は。る。尤。便。宜。の。地。を。  
 先。や。那。里。へ。赴。き。時。分。の。料。り。変。心。下。て。里。見。と。援。け。て。寄。隊。を。敗。ら。す。の。是。何  
 麼。と。談。ま。し。石。龜。師。弟。向。水。弟。兄。悦。び。勇。ま。て。他。議。及。び。王。人。の。情。地。の。乾。見  
 義。子。の。御。示。り。集。合。の。僅。半。日。許。の。程。來。會。さ。る。自。家。の。社。校。六。十。餘  
 名。及。び。告。る。次。困。太。受。續。て。却。小。可。の。越。路。の。市。人。悍。く。勇。る。物。部。の。十  
 宇。治。河。の。瀬。立。た。り。少。時。角。能。と。好。ま。老。て。も。使。氣。耗。れ。始。り。大。田。大

川主知れまゝに執り其後淫婦奸夫誣られて身の罪を罪人の倣  
 るに牢獄に敷かれし卿三つものも大坂主の救ひを以て罪を免れし  
 其後又西國河原より御身は値遇しひより政木主と共侶の館山の城攻め又  
 結城の法會中も伴れし執り左右川橋を必死の大厄向水糸兄弟の資助より  
 再生の妙四度及びいよいよ安房へ移りて御身の格別大田大川大坂主を  
 告ぐるに今政木主の云々と陳べり情由を以て饒みせぬか。と語話  
 亦卿も舒る日誼と孝嗣の推禁めり又天江主の我両敵の勝負を  
 ひふ昨日までの閉戦互角の勢あり。この時に至りて寄隊の三將戦車と焼きて  
 敗績多しと告る者あり。介る小長尾景春。那三將の隊を附。今朝も益  
 旗を建て岡山の三赴く我少知り思ふに景春一箇の隊兵を以て岡山の  
 かへ推寄る。那裏の空虚を視ひ知り攻めを欲する。人尙那壘を奪ひ

畧れる。臺の城の大害。情地は後を跟て仍る機を臨みて撃破らんと思ふ心  
 我衆告て情地は後を來ふける。豈計んや。義通君の一軍中途に景春相  
 逢ふ。他兵を雜へて野戦あり。里見の士卒勇る。あわね。景春も亦然る者  
 難風く士卒と二隊に分て。義通君の備在。其隊をみづら。撃乱し。閉戦  
 難義不見え。嗚呼孤軍の壮伎。們をり。景春と相柱。力戦時を相せ  
 かども我隊兵は俠客の志。軍陣に熟る者。且戎衣も器械も真物。真劍  
 る。これ勝と令ると難く。折よく和君の馳着あり。一瞬間に景春を敗  
 走らぬ。身をさ上。再戦の獲さ。わらけ。我黨の及ぶ所。雲と壤と異なる。感  
 服至極。いと祝せ。代四郎。紀二六。們夥兵。伴當の。へ。奇舎五壇。五と其  
 隊の兵。耳新。心地。この人。て。這友あり。是。命芽。出。和  
 當下大江親兵衛。甲乙の會話を。つらく。果て。且。答。命芽。出。和

殿の再會。我のこゝろを大阪天山大川大田自餘の武士の抜ひ必等一かへり以て  
 哉政木主は是忠孝の俊傑へ又石龜の義侠者且卿云其師孝順又  
 五十二太素も士が善く與して任使する積善餘慶の天助庫々も或は縲纒の  
 冤屈の陥れらるる。白刃頭不沾むといへども或は不測の敵の矢丸を敷きて急河  
 陥らるるといへども其死を起し生を回さず及びてしどりの甲を救せ丙で丁を援けし  
 因あり縁あり同忠同義造化の默契妙なる哉政木生の曩昔我が素藤對治の  
 日中戦功あり。只口管奉仕を薦め。猶云云と意衷を演じて従ふもあ  
 ざり。今日又唯ぞ不代り。御曹司の危く。野戦を援けたり。勅敵長尾  
 景春を防犯林示り。拵に實一人當千人。矧又石龜師弟向水枝。獨鎗弟兄  
 其徒と共侶。政木生に従ふ。當家の為。忠戰。始あり終あり。其舊縁を  
 推すと。いへば。仕へるといへば。皆是里見の家臣。同じ。其の長を以て。上る。を

御曹司の危く。今日又唯ぞ不代り。御曹司の危く。野戦を援けたり。勅敵長尾  
 景春を防犯林示り。拵に實一人當千人。矧又石龜師弟向水枝。獨鎗弟兄  
 其徒と共侶。政木生に従ふ。當家の為。忠戰。始あり終あり。其舊縁を  
 推すと。いへば。仕へるといへば。皆是里見の家臣。同じ。其の長を以て。上る。を  
 御曹司の危く。今日又唯ぞ不代り。御曹司の危く。野戦を援けたり。勅敵長尾  
 景春を防犯林示り。拵に實一人當千人。矧又石龜師弟向水枝。獨鎗弟兄  
 其徒と共侶。政木生に従ふ。當家の為。忠戰。始あり終あり。其舊縁を  
 推すと。いへば。仕へるといへば。皆是里見の家臣。同じ。其の長を以て。上る。を  
 御曹司の危く。今日又唯ぞ不代り。御曹司の危く。野戦を援けたり。勅敵長尾  
 景春を防犯林示り。拵に實一人當千人。矧又石龜師弟向水枝。獨鎗弟兄  
 其徒と共侶。政木生に従ふ。當家の為。忠戰。始あり終あり。其舊縁を  
 推すと。いへば。仕へるといへば。皆是里見の家臣。同じ。其の長を以て。上る。を

辱し値けり我子と敵不虜せられて阿容々々として憐れくあり許我山  
 内み笑れん先や今亦推寄せ大江と殺して義通を捕へて怨を復すあは生々  
 二とび還るべしとぞとせよと敦固に暴く軍扇をのり膝うち鳴き聲と張り眼を  
 瞪ら連り焦燥の威勢の隊長毎に諫難て猛可下知と傳へ馬をヨク豆  
 草と飼せ士卒は皆腰戰飯を使せて急人馬を調へけり却小可も敵の雜  
 兵ふらち雜りる景春の身邊まで紛れ入るといふり一とつと具のひたと詞  
 ひらく注進をせよと親兵衛はさもそあめとをり答て領くの騷々氣色をりり  
 登時三個の野兵が景春二とび推寄せまべりとの注進を側聞せる姥雲代  
 四郎以下の衆兵直塚紀二六漕地喜勘大石龜次團大越卿三向水五十二天枝

第百六十八回

舊恩と報答して成孝前言を全うせ

獨鈷素も吉須々利壇五二四的寄舎五郎等お至るまで皆愕然と目を注  
 ぎ胸安らざると思ひける開が中政木大孝嗣の敢驚く色もなく徐親  
 兵衛に向ひていさよ成智の論辯助言ふ似々憚りなきはるも敵の敗れ再  
 取らる猶三千の雄兵あり自家の僅か五六百も而も疲労れ士卒とりて怒氣  
 奮勇始倍せ敵と逆て野戦其恐らく勝と難く候べ誠か愚案かへとも  
 怒る者の誘ひ易かり今奇兵をりて他と征せ一戦必勝疑ひる候べ這頭あり  
 敵系柱る冬樹の蔭あり今在下隊兵を分り二三百名を授けり埋伏して  
 敵と敗らぬの甚摩と請問の親兵衛頭を歌けて其策をたあらはれ古  
 聖王の不従を征しぬりと思ふ正略成就奇兵をりてせ湯の祭を放ち武  
 王の討を誅あり如た王者の軍とのいつべ然る後の世とあは賢君有道の  
 正兵をり那乱虐を鎮る方て亦當かくの如くまべ我嘗富山不在



時姫神授與の陣法あり孫子の八門遁甲の陣是なり蜀漢の諸葛武侯も  
 この陣と布設てり昭烈の危窮を救ひたり那里の俗に是を孔明が八陣とも又  
 八卦の陣ともいへり其陣法の箇様々々と即地を畫き孝嗣並頭人等不  
 教示多く又争う今あふ在る隊の兵を振照俱教ふ分ち者五百名五十三太  
 從類六千名西的須々利の從兵六十餘名都て六百三十四名なり今是を八  
 十餘名に八分ちて八門を守らるべし這一門毎の隊長の政木生姥重直塚  
 須々利西的五十太素吉と我と八名を口足れりとを其進退を我這軍扇を  
 りと指揮せん皆よく我も從ふ景春と摘み去る景春尙あの陣をよく知り  
 東方生元門より入り北方五鬼の死門を突破り又生門より知るる其閉戦  
 互用する他知ざして死門より入り囊の物を探るが如く必一人も漏まらば或は又  
 景春の陣を知るとも他も亦然者され其機を査し且疑を戦ひて退る

只緩ゆる是を迂へ必急不追敷とて他我迂今この邊を見焦燥  
 急を及一合せて七二十一突りて蒐らひ胡意軽く戦ふ詭り敗れて走る却  
 我五個の夥兵と喜勘太の伴當始よりあて八陣の備の管へ各鍊砲城  
 推乃く這頭不故り并松の中枝に躲れ居て敵の進退を張る尙我後案の  
 如く景春八陣を突ぎて反て我詭りて敗れ走ると迂へての処に至る遣り過して  
 後陣の敵の馬を敷くしね景春是を驚か慌て退るとある時我急引返して  
 其乱るを攻敷く勝むとあるは大家の意を以るかと言町寧不説示せり  
 衆兵都て感服して指揮に従ふ中不孝嗣殊更親兵衛が宏論智計あり  
 多く敬服してかの如く少年の和漢今昔一人の後の世も類あるかと感て敵を  
 俟けり介程の長尾景春の二つ犬江親兵衛と死戦して擒められ其子為景  
 自ら復えと思ひ憐れる怒不堪ね毫も擬議せざみづろ真先馬を扶る左禰口

ひんてま

小二郎維龍も。右不梶原後平二景澄も。直江莊司包道と。宇佐美三郎職政も。其後陣を續け。軍兵約二千餘名。天を掩ふ勢ひ也。故の戰場を投返す。多。為景の事あり。この里にけり。と。随ひ。景春の馬を駐り。これ敵の退く。一町許前。面。隊長の那大江も。我。又。推寄。来。場。と。知。り。る。秋。布。儲。る。陣の光景。最。奇。く。も。敷。く。べ。所。る。を。似。ら。其。為。体。八。方。八。流。の。楮。幡。を。建。て。其。下。軍。兵。多。く。も。壁。景。八。箇。の。陣。門。を。て。閉。閉。時。る。四。方。相。當。り。四。隅。を。守。り。如。若。但。隱。々。と。て。雲。霧。の。其。四。下。に。起。外。り。推。包。む。あ。あ。ん。と。怪。し。ま。る。景。春。見。ると。稍。久。し。も。急。左。右。と。見。え。る。景。澄。維。龍。等。も。あ。ら。う。若。們。他。を。思。ひ。や。我。聞。唐。山。古。昔。の。陣。法。諸。葛。孔。明。が。八。陣。を。も。り。や。て。何。や。我。の。學。び。の。と。も。其。八。陣。の。攻。伐。の。者。生。門。の。入。り。又。生。門。の。出。され。必。失。あり。とい。ふ。那。陣。這。似。る。あ。ら。ま。縦。八。陣。を。も。り。那。八。犬。の。奴。們。の。幻。術。を。仍。と。い。へ。今。厭

勝の法どて。其。漫。敷。の。他。が。圍。衣。素。掛。ら。う。と。さ。る。と。の。故。我。又。憶。ふ。今。戦。ぎ。て。退。く。敵。の。必。隊。を。乱。し。て。趕。蒐。く。敷。く。せ。ん。其。逼。る。引。受。て。自。家。急。か。建。更。て。推。包。て。拘。ぐ。他。の。小。勢。入。我。の。大。勢。入。那。大。江。奴。と。擒。め。せ。ん。と。枝。る。果。実。を。挑。が。如。し。又。蝮。く。後。陣。へ。傳。へ。と。鼻。春。蝮。め。て。説。示。せ。景。澄。維。龍。感。佩。し。て。隨。即。包。道。職。政。下。知。と。傳。へ。後。陣。を。退。せ。り。引。返。を。親。兵。衛。見。つ。ら。ち。笑。て。然。り。と。あ。れ。思。ひ。し。と。景。春。果。し。て。我。陣。を。疑。ふ。是。を。敷。く。又。徒。に。退。れ。去。ら。ん。と。我。隊。を。乱。し。て。趕。逼。る。と。敷。く。ん。為。る。ん。謀。計。り。る。る。皆。緩。や。ふ。趕。ふ。と。と。隊。を。乱。さ。す。徐。々。と。是。を。趕。へ。も。敢。逼。ら。る。回。近。く。と。た。い。五。十。二。太。素。吉。乾。兒。們。と。俱。罵。り。う。ち。笑。ふ。小。石。を。抛。て。擲。く。景。春。見。く。と。怒。り。お。治。堪。な。那。奴。們。我。を。怕。る。れ。い。そ。近。く。趕。の。敷。く。て。侮。り。遊。ぶ。投。石。之。味。の。ま。那。期。お。至。る。疾。馳。向。く。奴。等。兵。每。返。せ。と。喚。つ。乗。る。馬。を。推。旋。ら。て。鎗。挾。み。て。敵。の。向。景

澄維龍の如く之端雄の壮俊也。近習外様の差別を。俱に怒り堪がれ。吐き嘔て  
 駈向ふ。政木孝嗣向水枝獨鉤須々利。四的其母も共侶の敵を挫きて且戰ひ  
 胡意敗れて乱れ走れ。親兵衛代四郎紀六も。獵場の獸の列卒繩を踏み如に  
 馬を鞭ち。足信せて逃走ると。景春の猶漏すと。隊兵を找め息も類れ。那  
 里をよと。軒程の後。又響く敵の銃音連發する程も。長尾の騎馬武者五  
 六名數られて人馬共侶。象棋倒る。いふ是も。驚く諸軍兵將帥士卒並て  
 皆胆を潰し。吐き嘔て叫びて。謀に乱る。癖を。後。敵を見。定め。濼と類れて  
 逃走れ。豫期する大江の隊の兵齊一吐と執て返す。中。不任と。撃。仆。其。敵。の  
 度。失ふ。虚滅。馬。踏。果。敢。る。命。を。頭。も。多。う。開。中。の。樋。口  
 小二郎維龍のい。主將を延。思。一騎敵中。鎗の尖頭。血を濺。力  
 戦。時。移。る。ま。あ。先。途。と。挑。と。政木孝嗣遙。見。て。通。敵。と。嘆。賞。し。ん。

鎗。挾。と。走。り。あ。て。名。告。か。つ。刺。と。找。め。維。龍。鎗。を。う。ち。振。り。扱。て。馬。を。馳。寄。  
 遣。差。る。一。上。二。下。と。挑。と。戦。ふ。送。の。武。藝。劣。る。を。優。と。他。雜。も。ぞ。死。を。争。ふ。勇  
 悍。對。立。せ。る。あ。あ。維。龍。の。數。度。の。闘。戦。疲。勞。れ。て。眼。や。眩。ま。け。孝。嗣。の。肉。め  
 鎗。と。拂。索。違。う。鎗。の。邊。を。刺。串。れ。て。馬。も。挫。と。落。か。孝。嗣。其。首。級。を  
 捕。む。只。馬。を。の。分。捕。を。牽。駐。め。ら。ち。棄。り。猶。敵。と。を。軒。ふ。ま。り。の。余。程。の  
 長尾景春の乱れて走る自家の主卒と禁めもあむ共侶の馬の足極信せ。脱く  
 由。二。と。敗。績。を。多。く。須。々。利。壇。五。郎。二。四。的。寄。舎。五。郎。の。下。の。野。武。士。十。人。許。の。族  
 族。と。軒。蒐。來。る。吸。禁。め。罵。辱。也。推。捕。籠。て。撃。と。競。を。長尾の近習五名返  
 去。合。せ。防。に。戦。ふ。音。も。劇。に。劍。戟。鎗。棒。寡。も。と。衆。敵。か。ら。長尾の近習の  
 疾。を。負。ぬ。も。二。人。の。寄。舎。五。壇。五。郎。の。鎗。の。縫。れ。て。仆。れ。景。春。怒。り。堪。が。れ。て  
 馬。を。馳。入。れ。も。下。を。鎗。尖。銳。を。け。れ。只。の。一。騎。不。駈。乱。れ。て。痛。疾。不。仆。者。三。人

寄舎五郎の壇五郎の俱あつた景春あつた中あつた難あつた或あつた肩あつた尖あつた高あつた股あつたをあつた刺あつたとあつた  
 殿内坐あつた仰あつた反あつた方あつた浩あつた外あつた政あつた木あつた孝あつた嗣あつた甥あつた雪あつた與あつた保あつた直あつた塚あつた紀あつた三あつた石あつた龜あつた次あつた園あつた太あつた越あつた卿あつた三あつた重あつた  
 見あつたのあつた主あつた卒あつた四あつた五あつた百あつた名あつたとあつた俱あつた景あつた春あつたとあつた趕あつた蒐あつた走あつたりあつた近あつたつあつた多あつた勢あつたのあつた敵あつた免あつたれあつたとあつた思あつた折あつたとあつた  
 直江包道あつた宇佐美職政あつた殘兵あつた二百餘名あつたとあつた將あつたをあつた索あつたてあつた返あつたりあつた多あつた推あつた蒐あつた敵あつたとあつた  
 受禁あつたてあつた入あつた乱あつたれあつた戦あつたへあつた景あつた春あつたのあつた今あつたのあつた虎あつた口あつたとあつた士あつた卒あつた小あつた讓あつたりあつた退あつたりあつた馬あつたのあつた喘あつたをあつた休あつたるあつた程あつた小あつた  
 梶原あつた後あつた平あつた景あつた澄あつたもあつた殘兵あつた二十名許あつたをあつた將あつたとあつた索あつたてあつた返あつたりあつた多あつた景あつた春あつたとあつた見あつた身あつた邊あつた  
 近あつたくあつた馬あつたをあつた馳あつたせあつた禮あつたをあつた做あつたてあつた詞あつた急あつた迫あつたりあつた諫あつたるあつた事あつた思あつたふあつたのあつた似あつたらあつたけあつた今日あつたのあつた閉あつた戦あつた機あつたをあつた失あつたかあつたてあつた  
 郎君あつた橋あつた小あつた舟あつたのあつた一あつた君あつた亦あつた陣あつた歿あつたありあつた長尾あつたの家あつたのあつた断あつた絶あつたせあつたるあつたをあつた思あつた召あつたされあつたとあつた  
 卒あつた死あつた伴あつた仕あつたらんあつたとあつたいあつたひあつたもあつた訖あつたらあつた鞭あつたをあつた景あつた春あつたがあつた乘あつたるあつた馬あつたのあつた尻あつたとあつた礮あつたとあつた撞あつたりあつた馬あつたとあつた撞あつたりあつた  
 走あつたりあつた其あつた舊あつた直あつた小あつた葛あつた西あつたのあつた二あつたへあつた走あつたりあつたゆあつた後あつた方あつた小あつた從あつた小あつた梶あつた原あつた景あつた澄あつた殘兵あつた毎あつたもあつた共あつた侶あつた皆あつた後あつた  
 れあつたとあつた走あつたるあつた程あつた又あつた趕あつた近あつたつあつた敵あつた兵あつたもあつた是あつた則あつた別あつた人あつたるあつた大あつた江あつた親あつた兵あつた衛あつた仁あつた向あつた水あつた五あつた十あつた天あつた

枝獨あつた鉦あつた素あつたもあつた吉あつた其あつた隊あつたのあつた壯あつた伎あつた數あつた十あつた名あつたとあつた從あつたへあつた連あつたりあつた馬あつたをあつた走あつたらあつたれあつた景あつた澄あつた只あつた  
 得あつた殘兵あつたをあつた留あつためあつた敵あつたとあつた防あつたむあつた是あつたよりあつた主あつた從あつた僅あつたのあつた二あつた騎あつた汗あつたをあつた馬あつたとあつた鞭あつたちあつたてあつた逃あつたるあつたをあつた親あつた  
 兵衛あつた仁あつたとあつた見あつた之あつた他あつたのあつた必あつた景あつた春あつたをあつた思あつたふあつた敵あつたのあつた殘兵あつたとあつた五あつた十あつた天あつた向あつた水あつた五あつた十あつた天あつた  
 輩あつたとあつた見あつた之あつた馬あつたとあつた拍あつたれあつた敵あつた中あつた無あつた入あつたれあつた又あつた馳あつた脱あつたてあつた遙あつたくあつた延あつたるあつた二あつた騎あつたのあつた敵あつたとあつた走あつたらあつたせあつたとあつた  
 趕あつた蒐あつた馬あつたのあつた名あつた小あつた負あつた青あつた海あつた波あつたのあつた駿あつた足あつたをあつた射あつたるあつた箭あつたのあつた如あつたくあつた一あつた瞬あつた間あつた小あつた近あつたつあつた隨あつた小あつた四あつた  
 下あつたのあつた响あつたくあつた聲あつた震あつた立あつた景あつた春あつた返あつたせあつた仁あつたをあつた大あつた江あつたとあつた知あつたまあつたとあつた逢あつたりあつた返あつたせあつたとあつた喚あつたりあつた鎗あつたをあつた  
 拈あつたりあつた馳あつたせあつたるあつた然あつたもあつた勇あつた士あつたのあつた威あつた勢あつたかあつた中あつたるあつたやあつたもあつたああつたらあつたざあつたれあつたとあつた景あつた澄あつたのあつた主あつたをあつた數あつたせあつたとあつた思あつたふあつた  
 心あつたをあつた鬼あつたのあつたああつたらあつた只あつた得あつた馬あつたをあつた乘あつた施あつたりあつたてあつた矢あつた聲あつたをあつた發あつたりあつた親あつた兵あつた衛あつたとあつた鎗あつたとあつた交あつたへあつたてあつた戦あつたふあつた程あつた小あつた  
 景あつた春あつたのあつた大あつた江あつたがあつた本あつた事あつたとあつた既あつた前あつた是あつたをあつた知あつたりあつた取あつた勝あつたとあつたかあつたりあつたとあつた思あつたひあつた今あつた景あつた澄あつたがあつた他あつたとあつた戦あつたふあつた不あつた可あつたとあつた見あつたるあつた走あつたらあつた馬あつたとあつた鞭あつたちあつた中あつたてあつた命あつたをあつた涯あつたのあつた落あつたしあつたけるあつた小あつた程あつた小あつた梶あつた原あつた後あつた平あつた景あつた  
 澄あつたのあつた大あつた江あつた親あつた兵あつた衛あつたとあつた戦あつたふあつたとあつたいあつたまあつた久あつたくあつたとあつた腕あつた衰あつたへあつた鎗あつた法あつた乱あつたれあつた既あつたにあつた危あつたくあつた做あつたりあつた

時景澄の従父昆弟あり。秋野五九郎泰儀と喚ばし壯士の亦景春の往  
 方と云ふ。料らざる小あまされ。今景澄が敵と闘戦の危れを見て宅を擬  
 議せし馬を馳寄せ相援け。披を敷ききり親兵衛の物ともせし精神を  
 まま加りて右中り左を拂ふ神出鬼没の嫖姚。景澄泰儀怒馬怕れて俱小  
 引外し馬を退け。鐘を鳴りて逃走せし。親兵衛猶逃さずと心とも  
 るく自家の衆を離れて迫り葛西の冬枯野邊まで赴かす。話分兩  
 頭。朝大塚信乃大飼現八杉倉武者助田税力助等の寄隊の三將  
 頭定成氏憲房の總軍既敗績して。乱れ走る。趕蒐來り。葛西を假名  
 町より半里許這方。林原の頭。又寄隊の三將と再戦の事の趣。既前  
 回見たり。然信乃門の僅二三千の小兵。地理を揣り切所。据りて。と  
 戦へ破られ。寄隊の三將。一旦敗軍の残燼。猶三萬餘の士卒。あれ。

先度の恥を盡んと。三百一競。未牌の時候。雄を分。

頭定頻り不焦燥。屢軍使を走らせ。左右の二將。謀。合。二面一度。

火箭を飛して。信乃現八門。籠り。茂林を焼く。欲。白石重勝。及隊

長等。の。士卒。下知。火。集。既。幾百枝。火。

一度。射。今。朝。烈。吹。風。鈍。火。線。吹。合。其

火。及。四。下。枯。草。移。り。雑。兵。們。何。事。も。不。救。

慌。俱。其。火。を。撲。滅。え。或。鎗。或。棒。を。執。る。不。儘。せ。枯。茅。萱。と。持。

憶。打。か。茅。萱。の。裏。の。獸。あり。是。則。別。物。る。御。牙。小。焦。火。を。結。着。

ま。戦。車。を。焼。大。猪。數。も。減。ら。六。十。五。頭。忽。焉。と。前。後。左。右。高。萱。枯

草。踏。爛。頭。れ。雑。兵。を。牙。の。楯。に。投。飛。せ。弥。驚。衆。兵。隊。長。主。將。

俱。胸。を。穿。て。野。猪。を。殺。れ。火。を。消。留。と。喚。ど。叫。へ。届。ぬ。下。知。と。怪。異。

三百一福の野猪の皆威暴れ哮り。又只寄隊の騎馬武者の馬足を牙の突  
 折は人馬俯累りて死するもの然る野火が逼れ。身と焦して叫ぶあり。と  
 信乃現八等へ是を告て然る勇なる者。直元逸友三百一致の隊兵を扱めて攻入  
 たる中央の大塚信乃並に真間井楢二郎勇士猛卒前後と争ふ勢に宛破竹の  
 如く。今日顯定を擒ふ做さる。何の時を待んやと。縦横を礙ふ散る。然る  
 も乱れ。寄隊の衆兵野猪に驚れ野火が趕れて恥と思ひ雜兵は皆零八落  
 逃て跡を尋らる。井の中白石城介重勝の先鋒の頭人雲霧布五六といふ  
 主君と後安退陣させんとし思ひに殘兵四五人を推圍め。程は外野火を  
 避て信乃が一隊と血戦。其勇るをねも寄隊の士卒は皆胆落して透  
 め。逃さ思ひ細裏る魚散電に似れ。敢戦ふ擬勢。僅に一千許る。犬  
 塚の隊の兵が撃破れ立脚も。事急る。敵加りて。反々自家を射る。わ

白石雲霧生防ふ甲斐の俱馬を射を瘡を負ひ。逃る士卒十人あり。ち  
 雜る。迹を埋め。落亡けり。有徳り。程寄隊の副将山内五郎憲房の  
 靈猪と野火の禍鬼を憶も。辟易して。二び總頼ある。折大飼現八信  
 道の継橋綿四郎喬梁と俱に隊兵を推找め。突然とて衝入る。馬と鎗頭  
 向ふ。前より。剩野火と野猪の寄隊の士卒は防ふ術なく。右往左往乱走を  
 這隊の頭人箇牧野汶八夏盛と喚做を猛者雁鳥裂八九郎と共侶。罵辱  
 あり。喚返して馬を跳らせ。三騎相並く。眉尖刀をも。敵を甚る。猛勢凄  
 け。敢近。者を現八は好敵る。思ひに継橋喬梁と共侶。馬を  
 上を鎗晃め。うら。向んと。程八八九郎。後より。突りて。二頭の野  
 猪。馬の後脚を蒐られて。忽地撞と。落し。能へ。思ひに。痛楚を。心  
 身を起して。逃る。雜兵。ふ。交り。影を。現八見。冷笑ひて

45  
54

思ふも似ぬ白徒有り。此の士卒も喬深も憶を吐と笑ひけり。然る山内憲房の  
 近習僅小五七名を従へ。假名町の方へ落てゆく程に現八も只一騎士卒先を  
 趕蒐多つ喉禁め寄りて鎧と拵と嘯々蒐れ。憲房の近習們は己をゆき  
 敵と迎へて。ふとふと振り刃の電光一騎の敵と侮りて。俱勇ましく。かひなく。  
 比皆現八が鎧下へ付るものあり。俯をもあり。竟ふ羽翼を喪ひ。憲房の逃るも  
 他逃さず。と覚期の大刀風馬を馳を馳達せ。一霎時の挑戦あり。原  
 是婦人のみを生育て。艱苦を知らず。民情を本其の心驕りて身は柔弱。貴介  
 公子のありて。大士の敵もよる者。ねの持る大刀を打落されて。怯むに現八馬  
 乘よきて。撥れを引着て。宙吊を動を四下と見ろ。折々。継橋綿四郎  
 喬深の五百個許の士卒をねの馬を走りて。あはれ。現八や々と喉近づけ。やま  
 継橋生の生口。寄隊の副将。多く。死定客。客は。暴を。逃さ。

今乗捨る馬の鞍局不勝着て牽りて去りて疾即君の御陣營へも  
 りせの。と。喬深。欽び。養て。馬より下りて。士卒と俱弱。果る。憲房と抱え  
 今。推縮めて。件の馬。あつち。棄せ。鞆を解。十の字。緊く。膝。又。故の。己。馬  
 うち。棄。現八。欽び。速相別れて。牽せて。馳。野。又。野。猪。の。怪。異。あり  
 下。の時。寄。一。將。足。利。成。氏。の。一。隊。那。野。火。も。飛。程。又。野。猪。の。怪。異。あり  
 あり。猶。直。元。逸。友。等。と。連。り。挑。戦。本。程。小。猛。可。自。家。の。兩。隊。頭。定。憲。房。父  
 子の陣より乱れ謀ど。敗績。成。氏。の。散。馬。多。則。在。村。と。新。織。素。仍。不  
 件の父子を援けんと。隊兵を分。遣。けり。其の故。不。成。氏。の。士卒。減。少。あ。り。け。不。敵。の。

思ふも似ぬ白徒より死あつたとへあつた士卒も喬深由あつた憶を吐あつたと笑ひけり然あつた山内憲房ハ  
 近習僅あつた五七名を従あつた。假名町の方へ落ても程あつた現八あつた一騎士卒先あつた  
 趕蒐あつたあつ喚禁め窘めて鎧を拵あつたと噓々蒐れあつた憲房の近習ハ已あつたとゆあつた  
 敵を迎あつたててあつた振る刃の電光一騎の敵と侮あつたりあつた俱あつた勇あつたかひもやあつた  
 皆現ハあつた鎧下あつた小あつた介あつたのあつた府あつたをあつたありあつた。竟あつた羽翼を喪あつたひあつた。憲房ハ逃あつたるあつた  
 他逃あつたとあつた覺期の大刀風馬を馳あつたを馳違あつたせあつた。一霎時ハ挑戦あつたハあつた原  
 是婦人あつたのあつた生あつた育あつたてあつた艱苦あつたと知あつた民情あつたと本あつた心驕あつたりあつた身あつたのあつた柔弱あつた貴介  
 公子あつたのあつたあつてあつた大士あつたの敵あつたもあつた足あつたる者あつたをあつたねあつた持あつたるあつた大刀あつたと打落あつたされてあつた怯あつたびあつた現八馬  
 乘あつたよあつたてあつた撥あつた挑あつた引あつた着あつたてあつた宙吊あつたをあつた動あつたをあつた四下あつたと見あつたるあつた折あつた多あつた。継橋綿四郎  
 喬深ハ五百個許あつたの士卒あつたをあつたねあつた馬あつたを走あつたりあつた合あつたてあつた現八あつたハヤあつたと喚あつた近あつたつあつたとあつた  
 継橋生の生口あつたの寄隊あつたの副將あつたをあつた多あつたくあつた死あつた實客あつたをあつた暴あつたをあつた逃あつたを

45  
て4

これ今乗捨あつたる馬あつたの鞍局あつた小藤あつた着あつたて牽あつたりあつたて疾あつた那君あつたの御陣あつた營あつたハ  
 らせあつたとあつた喬深あつた飲あつたびあつた養あつたて馬あつたより下あつたりあつた士卒あつたと俱あつた弱あつた果あつたるあつた憲房あつたと抱あつたた  
 合あつたりあつた推縮あつためてあつた件あつたの馬あつたふあつたりあつた棄あつたせあつた。鞆あつたを解あつたてあつた十字あつたの字あつた緊あつたくあつた膝あつた丈あつた。又故あつたの己あつた馬あつた  
 らあつた棄あつたりあつた。現八あつたハあつた勢あつたを述あつた相別あつたれてあつた幸あつたせあつた。陣あつた所あつたを投あつたてあつたてあつただけあつた。案  
 下あつたの時あつた寄あつたもの一將あつた足利成氏あつたの一隊あつたハ那野火あつたも飛移あつたらあつた。又野猪あつたの怪異あつたもあつたり  
 とも猶あつた直元あつた逸友あつた等あつたと連あつたりあつた挑戦あつたハ程あつた小猛あつた可あつた自家あつたの兩隊あつた頭定あつた憲房あつた父  
 子の陣あつたより乱あつたれあつた謀あつたどあつた敗績あつたをあつたとあつた成氏あつたも敬あつた馬あつたをあつた。則あつた在あつた村あつたと新織あつた素あつた仍あつた  
 件あつたの父子あつたと援あつたけあつたてあつた隊兵あつたを分あつたく遣あつたけりあつた。故あつた不あつた成あつた氏あつたの士卒あつた減少あつたありあつたけあつた敵あつたハ  
 勢あつたを以あつたて攻あつた撃あつたらあつたと甚あつた急あつたに辭あつた我あつたの士卒あつたハ二あつた陣あつたの敗軍あつたハ氣力あつた折あつたけてあつた敷あつたる  
 者あつた尠あつたくあつた其餘あつたハ多あつたく落あつた亡あつた成氏あつたの旗あつた下あつたハ相あつた従あつた近あつた臣あつた股肱あつたの毎あつた科あつた草あつた草あつた郎  
 望見あつた一郎あつた。是あつた宗あつた徒あつたの精兵あつたをあつた五六百名あつた過あつたぎあつたりあつた。成氏あつた嗟嘆あつたハ堪あつたぎあつたて





伏遊神良

八元傳九車卷四

三十一



れいしよき  
靈猪二之八  
あんにん  
神力を見ん

八元傳九車卷四

文澤堂

今一も是生と戦殺せんと磨ら揮々士卒と找め敵の隊長杉倉武者助直  
 元の一隊と逆へ推蒐る這時遅し那時速し颯と降し多狂風沙石も飛樹  
 枝と鳴りて天さ暗く身随ふまりの多一箇野猪大なると犢も驚く疾と  
 虎も似たり歎と思不可の猛威り成氏の乗る馬を駈仆し主を滾して起んと  
 蠢く甲の表帯と牙引掛け背に載る往方も知ざる不けり然る今去の光景を敵も  
 自家の士卒們も正可を見て知る者みれば只狂風は驚愕に怯れて活路も  
 直元逸友隊兵を找め中る不任せり  
 在村新織帆大丈素紗の成氏の軍令に従ひて二陣の敗軍と援んも五六千の隊  
 兵を領ていそ程の頭定親子の戦ひ敗れ今ゆく極ふもあは又後方と見れば我  
 一隊も亦敗軍と違ひけん自家の士卒の落てゆく後影も見えぬ在村の嘆

口氣して馬を駐め素紗を喚近つけ叫く帆大丈和殿の思へるもの  
 るぞ我陣も亦敗北の兆見え我君の恙なき陣致さぬ歎知れぬも左ても  
 右ても三三の負を又建復さるもの然るも猶ほ在る必敵の傳ゆるん  
 淋我各宅眷あり疾く乃て安危を揣らざる後悔腑を噬んもの  
 仍ち所々賢慮宜き利あり然るも死伴仕んと心て馳て同道より千住に  
 赴く程の葛西の底不知野を過る時従ひ来る四五千の士卒ハ又蝟く落七くオオ  
 四個の鑢奴の今も猶馬前在る在村と素紗の俱も呆れてうら喧く心細き涯  
 好々負うる那奴們ハ亡くを結句優らりといふ  
 より外に櫛も見る見耳を限り通るの野をさく踰んを俱も馬を早わける  
 有徳一程の大塚信乃の御高頭定を敷も果さず走りける送恨も堪は  
 自家の士卒も先もて往方と素紗で只一騎赴くと来る馬の左右も従ふた所

雑兵僅五夫名喘々を續ける。折る前而見且其足挫を早めて二騎の落  
人あり。俱小兜を脱捨けん皂裂れて頭を裏める。一個の綿綉の戦袍。一個の  
絳白の段々間道ある戦外套を被て。その相譚ひくも人馬の背散五六町西  
あり。信乃のち相て。鎧不堪を那錦繡の戦袍を被る。落武者の必是山内  
管領をあらんぞむ。とのを従兵ら守て。知る者ありて告る。否他の管領ふひん  
小可豫相記あり。戦袍被る。其の權宰横堀史在村。又戦外套の其次職を  
新織帆太夫素仍紛れもあふ。とのへ信乃又歎いて。今亦是我仇をく。  
ののの服小残。二枝の表袴の征前板半。弓合直て馬を走らせ聲高う。  
其里小落。騎馬武者の游技の任臣横堀在村。新織帆太夫素仍を。我  
は大塚信乃。金碗成考。若們奸佞邪智の本性。曩我を虐けて搦捕ま  
すの。新織素仍を緝捕の頭人として。我必徳の客令。穿數金。この

急るのけけ。義士山林房。我が死代り。血染の衣。縋ふ為り。我背小存。今  
を復も舊恩舊怨思ひ知るや。喚れ在村素仍。ち散馬はて馬を駐めて見  
る。能彎固めて。彈と射る。矢局差の素仍。左の耳より。頭を。見深く射ら  
せて。叫ぶ。果を馬より。隊で死では。是を。怖る。在村の項を。縮め。泥障を。蹴鳴  
る。馬を馳々。逃へと。も。信乃の透さ。を。趕。鬼る。馬の足。撥も。弥疾。弓勢。前接  
速る。弦响と。共。横堀。在村。の頂。の邊を。丁と射られて。苦と叫びて。落も。せ。日。鞍  
局。小。俯。る。儘。小。走れる。馬。小。棄せられて。死。活。知。む。做。ら。る。又。那。四。個。の。鑣。奴。主。小  
先。逃。亡。せ。し。信。乃。の。二。次。趕。ま。る。小。矢。種。既。不。盡。死。一。只。得。從。兵。の。續。く。と  
俟て持せ。鎗と。檢。合。り。若。們。我。の。求。る。も。權。且。這。里。小。居。か。この。拾  
鞭。鳴。り。又。在。村。を。趕。蒐。け。り。浩。処。小。大。江。親。兵。衛。の。櫛。當。長。尾。景。春。の。隊  
長。梶。原。後。平。二。景。澄。と。荻。野。五。九。郎。泰。儀。が。親。兵。衛。と。戦。ひ。負。て。逃。る。と。連



下不<sup>あつ</sup>趕<sup>く</sup>蒐<sup>る</sup>勢<sup>ひ</sup>己<sup>こと</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>心<sup>こころ</sup>も<sup>ろ</sup>く<sup>も</sup>葛<sup>わづら</sup>西<sup>の</sup>底<sup>そこ</sup>不<sup>し</sup>知<sup>ら</sup>野<sup>の</sup>不<sup>し</sup>來<sup>ら</sup>け<sup>り</sup>。這<sup>こ</sup>  
 里<sup>こ</sup>の<sup>ち</sup>范<sup>ん</sup>々<sup>々</sup>の<sup>あ</sup>曠<sup>くわう</sup>野<sup>の</sup>之<sup>の</sup>茅<sup>ちやう</sup>苴<sup>じ</sup>直<sup>ちやく</sup>枯<sup>く</sup>芒<sup>まう</sup>花<sup>か</sup>弥<sup>み</sup>か<sup>が</sup>上<sup>かみ</sup>不<sup>し</sup>腰<sup>こし</sup>累<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>路<sup>みち</sup>去<sup>さ</sup>り<sup>あ</sup>ぬ<sup>地</sup>方<sup>ちやう</sup>を<sup>と</sup>  
 とも<sup>あ</sup>逃<sup>に</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>の<sup>み</sup>路<sup>みち</sup>を<sup>え</sup>擇<sup>えら</sup>ま<sup>ま</sup>。又<sup>また</sup>趕<sup>か</sup>ふ<sup>者</sup>の<sup>み</sup>青<sup>せい</sup>海<sup>かい</sup>波<sup>は</sup>の<sup>せ</sup>駿<sup>せん</sup>足<sup>あし</sup>を<sup>の</sup>乘<sup>のり</sup>え<sup>れ</sup>。荊<sup>しやう</sup>棘<sup>げき</sup>延<sup>えん</sup>蔓<sup>まん</sup>れ<sup>り</sup>  
 野<sup>や</sup>草<sup>そう</sup>と<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>と<sup>も</sup>せ<sup>ぎ</sup>既<sup>すで</sup>不<sup>し</sup>七<sup>しち</sup>親<sup>しん</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>の<sup>ふ</sup>兩<sup>りやう</sup>個<sup>ご</sup>の<sup>て</sup>敵<sup>てき</sup>不<sup>し</sup>近<sup>ぢん</sup>。隨<sup>ま</sup>不<sup>し</sup>逢<sup>ほう</sup>返<sup>へん</sup>せ<sup>と</sup>喚<sup>わ</sup>く<sup>は</sup>く<sup>は</sup>  
 敏<sup>みん</sup>が<sup>れ</sup>枯<sup>く</sup>草<sup>そう</sup>踏<sup>ふ</sup>踏<sup>ふ</sup>馬<sup>ば</sup>を<sup>の</sup>く<sup>く</sup>跳<sup>と</sup>り<sup>ま</sup>。後<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>馳<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>の<sup>背</sup>を<sup>の</sup>鎗<sup>やり</sup>の<sup>と</sup>刺<sup>さ</sup>ま<sup>く</sup>  
 する<sup>時</sup>怪<sup>あや</sup>む<sup>べ</sup>。之<sup>の</sup>業<sup>わざ</sup>取<sup>と</sup>の<sup>敏</sup>敏<sup>みん</sup>分<sup>ぶん</sup>中<sup>ちゆう</sup>最<sup>さい</sup>大<sup>だい</sup>の<sup>坑</sup>坑<sup>けい</sup>あり<sup>し</sup>。知<sup>ち</sup>ね<sup>ば</sup>馬<sup>ば</sup>蹄<sup>てい</sup>を<sup>踏</sup>踏<sup>ふ</sup>楓<sup>ふう</sup>れ<sup>り</sup>  
 人<sup>ひと</sup>馬<sup>ば</sup>愕<sup>おど</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>陥</sup>陥<sup>おち</sup>り<sup>し</sup>。在<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>も<sup>の</sup>見<sup>み</sup>を<sup>ま</sup>を<sup>り</sup>し<sup>し</sup>。景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>是<sup>こゝ</sup>不<sup>し</sup>氣<sup>き</sup>力<sup>りき</sup>と<sup>り</sup>て<sup>馬</sup>乘<sup>のり</sup>返<sup>かへ</sup>し<sup>て</sup>  
 鎗<sup>やり</sup>の<sup>と</sup>刺<sup>さ</sup>殺<sup>ころ</sup>さん<sup>と</sup>合<sup>あ</sup>直<sup>ちやく</sup>を<sup>信</sup>信<sup>のぶ</sup>の<sup>折</sup>折<sup>を</sup>り<sup>し</sup>。大<sup>だい</sup>塚<sup>づか</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>猶<sup>なほ</sup>も<sup>横</sup>横<sup>よこ</sup>堀<sup>ほり</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>。村<sup>むら</sup>を<sup>趕</sup>趕<sup>か</sup>捕<sup>と</sup>入<sup>い</sup>  
 と<sup>と</sup>只<sup>ひ</sup>管<sup>ひさ</sup>小<sup>こ</sup>馬<sup>ま</sup>を<sup>走</sup>走<sup>は</sup>り<sup>し</sup>。程<sup>ほど</sup>を<sup>見</sup>見<sup>み</sup>れ<sup>ば</sup>三<sup>さん</sup>騎<sup>き</sup>の<sup>武</sup>武<sup>ぶ</sup>者<sup>しや</sup>を<sup>見</sup>見<sup>み</sup>り<sup>し</sup>。一<sup>いつ</sup>騎<sup>き</sup>の<sup>其</sup>其<sup>その</sup>兩<sup>りやう</sup>敵<sup>てき</sup>を<sup>と</sup>  
 趕<sup>か</sup>ふ<sup>者</sup>を<sup>く</sup>。之<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>不<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>。一<sup>いつ</sup>と<sup>思</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>し</sup>。大<sup>だい</sup>江<sup>かう</sup>親<sup>しん</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>不<sup>し</sup>似<sup>に</sup>し<sup>し</sup>。久<sup>く</sup>且<sup>かつ</sup>評<sup>ひやう</sup>り<sup>し</sup>。且<sup>かつ</sup>殺<sup>ころ</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>と</sup>  
 それ<sup>ら</sup>も<sup>あ</sup>ぬ<sup>飲</sup>と<sup>さ</sup>ら<sup>り</sup>不<sup>し</sup>聲<sup>こゑ</sup>と<sup>楓</sup>楓<sup>ふう</sup>と<sup>あ</sup>る<sup>時</sup>。其<sup>その</sup>武<sup>ぶ</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>忽</sup>忽<sup>とつ</sup>馬<sup>ば</sup>と<sup>業</sup>業<sup>わざ</sup>最<sup>さい</sup>優<sup>ゆう</sup>る<sup>坑</sup>坑<sup>けい</sup>中<sup>ちゆう</sup>へ<sup>入</sup>

馬<sup>ば</sup>も<sup>く</sup>陥<sup>おち</sup>し<sup>後</sup>後<sup>ご</sup>れ<sup>て</sup>走<sup>は</sup>り<sup>し</sup>。一<sup>いつ</sup>騎<sup>き</sup>の<sup>敵</sup>敵<sup>てき</sup>突<sup>つ</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>返</sup>返<sup>かへ</sup>り<sup>し</sup>。鎗<sup>やり</sup>の<sup>と</sup>坑<sup>けい</sup>を<sup>劔</sup>劔<sup>けん</sup>敵<sup>てき</sup>と<sup>刺</sup>刺<sup>さ</sup>殺<sup>ころ</sup>  
 さんと<sup>馬</sup>馬<sup>ば</sup>を<sup>寄</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>し</sup>。信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>吐<sup>つ</sup>嗟<sup>さ</sup>と<sup>馬</sup>馬<sup>ば</sup>馳<sup>ち</sup>り<sup>し</sup>。や<sup>れ</sup>れ<sup>白</sup>白<sup>しろ</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>下</sup>下<sup>くだ</sup>し<sup>し</sup>。と<sup>罵</sup>罵<sup>のの</sup>り<sup>し</sup>。鎗<sup>やり</sup>と<sup>見</sup>見<sup>み</sup>  
 り<sup>り</sup>。刺<sup>さ</sup>を<sup>找</sup>找<sup>た</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>ら<sup>見</sup>見<sup>み</sup>て<sup>信</sup>信<sup>のぶ</sup>誰<sup>たれ</sup>と<sup>問</sup>問<sup>と</sup>せ<sup>果</sup>果<sup>は</sup>て<sup>信</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>答<sup>こた</sup>へ<sup>信</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>我<sup>われ</sup>是<sup>こゝ</sup>  
 大<sup>だい</sup>江<sup>かう</sup>親<sup>しん</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>が<sup>義</sup>義<sup>ぎ</sup>兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>里<sup>り</sup>見<sup>み</sup>殿<sup>てん</sup>の<sup>御</sup>御<sup>ご</sup>内<sup>うち</sup>に<sup>八</sup>八<sup>はち</sup>犬<sup>いぬ</sup>士<sup>し</sup>の<sup>一</sup>一<sup>いつ</sup>人<sup>ひと</sup>。犬<sup>いぬ</sup>塚<sup>づか</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>成<sup>なり</sup>孝<sup>かう</sup>之<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>來<sup>きた</sup>  
 好<sup>こう</sup>敵<sup>てき</sup>ご<sup>え</sup>ん<sup>れ</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>白</sup>白<sup>しろ</sup>井<sup>い</sup>の<sup>隊</sup>隊<sup>たい</sup>長<sup>ちやう</sup>。樺<sup>か</sup>原<sup>はら</sup>後<sup>ご</sup>平<sup>へい</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>是<sup>こゝ</sup>當<sup>あた</sup>の<sup>敵</sup>敵<sup>てき</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>わ</sup>ぬ<sup>も</sup>勝<sup>かち</sup>  
 負<sup>ふ</sup>を<sup>決</sup>決<sup>けつ</sup>せん<sup>の</sup>と<sup>名</sup>名<sup>な</sup>告<sup>つ</sup>り<sup>相</sup>相<sup>あ</sup>喚<sup>わ</sup>く<sup>と</sup>。鎗<sup>やり</sup>と<sup>交</sup>交<sup>か</sup>す<sup>戦</sup>戦<sup>せん</sup>の<sup>程</sup>程<sup>ほど</sup>不<sup>し</sup>既<sup>すで</sup>。迫<sup>せま</sup>り<sup>逃</sup>逃<sup>に</sup>げ<sup>る</sup>。我<sup>われ</sup>  
 の<sup>心</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>決</sup>決<sup>けつ</sup>せん<sup>の</sup>と<sup>名</sup>名<sup>な</sup>告<sup>つ</sup>り<sup>相</sup>相<sup>あ</sup>喚<sup>わ</sup>く<sup>と</sup>。鎗<sup>やり</sup>と<sup>交</sup>交<sup>か</sup>す<sup>戦</sup>戦<sup>せん</sup>の<sup>程</sup>程<sup>ほど</sup>不<sup>し</sup>既<sup>すで</sup>。迫<sup>せま</sup>り<sup>逃</sup>逃<sup>に</sup>げ<sup>る</sup>。我<sup>われ</sup>  
 野<sup>の</sup>五<sup>ご</sup>九<sup>く</sup>郎<sup>らう</sup>泰<sup>たい</sup>儀<sup>ぎ</sup>の<sup>這</sup>這<sup>こゝ</sup>光<sup>こう</sup>景<sup>けい</sup>と<sup>見</sup>見<sup>み</sup>ら<sup>る</sup>。只<sup>ひ</sup>得<sup>え</sup>馬<sup>ば</sup>を<sup>乘</sup>乘<sup>のり</sup>復<sup>かへ</sup>り<sup>し</sup>。又<sup>また</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>の<sup>力</sup>力<sup>りき</sup>を<sup>勦</sup>勦<sup>けん</sup>  
 せ<sup>て</sup>連<sup>れ</sup>り<sup>挑</sup>挑<sup>てう</sup>と<sup>戦</sup>戦<sup>せん</sup>へ<sup>信</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>撓<sup>たふ</sup>る<sup>色</sup>色<sup>いろ</sup>も<sup>ろ</sup>く<sup>左</sup>左<sup>ひだり</sup>の<sup>敵</sup>敵<sup>てき</sup>を<sup>受</sup>受<sup>う</sup>け<sup>る</sup>。劇<sup>げき</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>鎗</sup>鎗<sup>やり</sup>法<sup>ぽう</sup>を<sup>勦</sup>勦<sup>けん</sup>  
 兩<sup>りやう</sup>敵<sup>てき</sup>共<sup>ども</sup>不<sup>し</sup>腕<sup>うで</sup>乱<sup>らん</sup>れ<sup>て</sup>引<sup>ひ</sup>外<sup>が</sup>え<sup>と</sup>せ<sup>程</sup>程<sup>ほど</sup>不<sup>し</sup>泰<sup>たい</sup>儀<sup>ぎ</sup>の<sup>項</sup>項<sup>かた</sup>を<sup>刺</sup>刺<sup>さ</sup>れ<sup>て</sup>馬<sup>ば</sup>より<sup>仰</sup>仰<sup>おほ</sup>さ<sup>る</sup>。不<sup>し</sup>墜<sup>た</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>と</sup>  
 景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>是<sup>こゝ</sup>不<sup>し</sup>敵<sup>てき</sup>馬<sup>ば</sup>怕<sup>おそ</sup>れ<sup>て</sup>逃<sup>に</sup>げ<sup>る</sup>。思<sup>おも</sup>ふ<sup>聊</sup>聊<sup>りやう</sup>も<sup>其</sup>其<sup>その</sup>便<sup>べん</sup>り<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>小<sup>せう</sup>髻<sup>げん</sup>を<sup>刺</sup>刺<sup>さ</sup>  
 れ<sup>ど</sup>も<sup>亦</sup>亦<sup>また</sup>馬<sup>ば</sup>を<sup>墜</sup>墜<sup>た</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>と</sup>登<sup>のぼ</sup>り<sup>時</sup>。信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>兩<sup>りやう</sup>個<sup>ご</sup>の<sup>敵</sup>敵<sup>てき</sup>の<sup>死</sup>死<sup>し</sup>活<sup>かつ</sup>を<sup>敢</sup>敢<sup>あ</sup>て<sup>見</sup>見<sup>み</sup>ぬ<sup>も</sup>。坑<sup>けい</sup>の<sup>頭</sup>頭<sup>あたま</sup>馬<sup>ば</sup>を<sup>杖</sup>杖<sup>つゑ</sup>を<sup>聲</sup>聲<sup>こゑ</sup>

高き不喚る中。方僅諺て這坑へ陥り一騎馬武者大江より親兵衛を志  
 以我大塚信乃既不和殿の兩敵の我鎗尖の刺滅らる。我這鎗の幹當  
 携りてとんと出より。告喚被る。兩三番やと鎗を坑中へ繰下さま。做程不怪じ  
 下這坑中より起騰る。白氣あり。隱々として煙の如く天を沖ると見る程。由あり。又  
 忽焉と風雷の真く如く音響えて。颯と吹かす猛風と共に大江親兵衛久馬ひり  
 く拾はされ。脚も身も恙あらず。馬も亦故の儘。主を棄せ。端然と坑の  
 畔に立。信乃の二とび胆を淡しく。且是且終び不堪あり。眼と定め熟  
 視。原來大江恙あり。不思議の面會る。昔我の徳あり。和殿の  
 親の終焉不誓ひ。言の虚しく。今日果しは依。一さよと報る言の葉の  
 敏系。この段特長や。るれ。又巻を易て。下の回解分る。と聴ね。

南總里見八代傳第九輯卷之四十一終

